

日本最初? のQSLカード

JAZAER, 荒川泰蔵

国連局4U1UNの元会長HB9RS, Dr. Max C. de Henselerから久しぶりに手紙が届き、封を切って驚きました。そこから出てきたのは、今は亡きJA3HAM, 草間貫吉さんの初期のQSLカードでした。しかも、その裏には何と、アマチュア無線50周年記念 (昭和52年9月24日発行)の郵便切手が貼られ、初日の記念印 (小型印)が押印されていて、「To HB9RS from JA3HAM ex JXAX」と書かれています。

Maxとは私が米国に駐在していた1980年代に知り合い、4U1UNから度々運用させて頂いた仲で、その後も交友は続いているのですが、草間貫吉さんとも懇意だったとは知りませんでした。草間貫吉さんといえば、日本のアマチュア無線の草分けの一人で、日本で最初のアマチュア無線局AJAXを開局された方です。それから数えて50年目に発行された切手ですから、草間さんにとっては特別に意味のある切手だったと思います。

ちょうどこの切手が発行された昭和52年9月24日には、東京・晴海の「東京国際貿易センター」で、第1回アマチュア無線フェスティバルが開かれていました。そこには京橋郵便局の臨時出張郵便局が開設されていたので、記念切手でも買って初日記念印を押印してもらおうと出かけたのですが、そこで偶然に草間貫吉さんに出会いました。草間さんは手にAJAXの古いQSLカードを4, 5枚手にしておられ、これが残っている最後のQSLカードだが、これに記念になる切手を貼って押印してもらおうと一緒に行くと一緒に列に並ばれました。

でもどの位置に切手を貼ってどのような印を貰うのが適当かよく分からない様子だったので、郵趣ではこのようにしていると教えて差し上げたところ、記念にと貴重なQSLカードを1枚下さいました。確か一緒に居合わせたJA1RAE, 留分優さんも1枚頂かれ、3人で記念の切手を貼って押印をして貰ったことを覚えています。

従って草間さんの手元には2, 3枚しか残っていなかったはずですが、その内の1枚がMaxに送られていたとは全く知る由もありませんでした。そして、それがMaxのコレクションに加えられて30年もよく保存され、今、私の手元に送られて来たとは、なんと不思議なご縁と感じています。

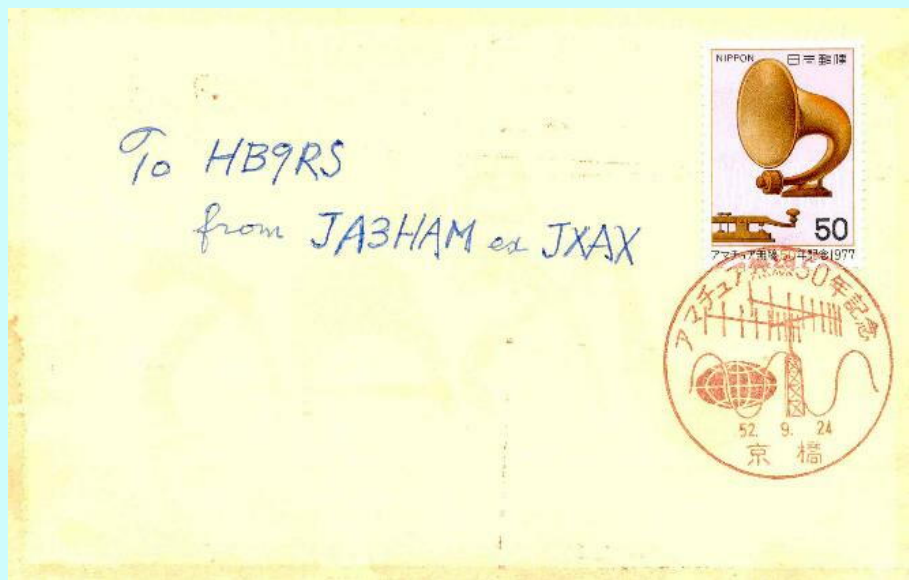
JARL KANKICHI KUSAMA ARRL
HIRANO, MIKAGECHO, NEAR KOBE, (LON: E 135° 14' 58" / LAT: N 34° 43' 6")

JAPAN

TO RADIO _____
VY GLD TO QSO AT _____ SWIT ON _____ WX _____
CT _____

QRB	AUD. READ.	ANT. strand wire	TRANSMITTER	RECEIVER
QRH hr	QSB	E/W	System Xtal control	O-V-I
	QSS	mm. 2	fone ex. ags.	Tubes UV. 199
	QSSS	m. long.	Tubes 201A, 201A-202, 203A	Ckt. UV. 199
	QRN	m. hi.	Input. W	Direct cpld.
	QRM	CTPSE, strand wire	G.R.A.C. 1,000 V	Wagant
	QRB	N S	M.C. 500 V on plt.	Fone
	QRH	mm. 2	Radn. M.A.	Baldwin C.
	QRH hr	E W	Source 60 cycle 110V	

REMARKS: OLD 3KK
DX: Sigs-ac, am, na, nu, oa, oh, op, oz, sa, sb, su. Fone-ac, nu, oa, op, oz.
PSE QSL BEST 73'S OM! Sig. *K. Kusama*



大阪国際交流センターラジオクラブ

大阪市-サンフランシスコ市 姉妹都市
50周年記念局開局

8N3OSA 8J3SF

CN (モロッコ)

正月
休み

観光旅行

JH3AEF 東條 純一

CNの旅

ツアーの始まりに見たものは、とてつもなくでっかいモスク、ハッサン二世モスクであった。この国を旅している間、どのような小さな集落でも必ずモスクに出会った。西欧に見られる教会と同じように。そしてどのモスクにも教会のそれと同じような高いミナレットとよばれる塔があり、あのオーバーモジのスピーカーが設置されていた。すなわち塔はお祈りの場所なのだそう。ハッサン二世とは第二次大戦後、二代目の国王で、その偉業を称えての創建である。すでに多くの人にお馴染みだが、その表面のモザイク装飾は、目を見張るばかりの鮮やかさ、侘び、寂びを解する日本人には、ここまでやるかと感じる人も少なからず。内部のしつらえにも全ての部分に細かい彫刻が施され、その模様はアラブ絨毯の模様と通じるものがあり、すべて対称に配置されていた。

この巨大なモスクの屋内収容人員は25000、施設全体には更に80000人を収容するというのだからその規模が想像できよう。収容人員もさることながら、彼等の誇るところは、全ての資材を国内から調達し、全てをモロッコ人の労働力で完成させたところであるらしい。ただ、建築は1980-1990年代で歴史的価値には乏しいものであった。

カサブランカを出たランクルは一路マラケッシュ方向、南に向かって快調であった。交通渋滞知らず、市街地を離れると行き交う車もまばらになった。道路は良く整備されているのだろうか、少し違ったニュアンス、何処まで行っても十分な広さが確保されている。しかしその両サイドは地道のまま、この部分を現地人は口バに乗り、羊を引き、時には人だけが車を気にせず往来している。それだけ幅広くしつらえられている。中央部は車の行き来に充分過ぎる幅できれいに舗装が行き届いていた。感心したことは何処まで行けども舗装の傷みの見られないことだった。市街地周辺と思しきところを過ぎると、乾いた砂の大地が広がり、家々の軒を気にして走るわが国とは全く事情は違っていた。それでも、道路から少し離れたところには、土の家が散在する集落もあり、植物も不自然無く育っていた。

とTの携帯電話が鳴った。日本語で話している。「それやったら、病院へ行きますか」とか何とか話している。「喘息の患者がおって急にどうしようもない強い発作が出る場合がありますねん」とのこと。やっぱり今のは大阪の患者さんからの電話やったんか。それにしてもあんた偉いな、頭が下がるは。何となく無性に便利すぎてというか、そら恐ろしさのようなものを感じた一瞬であった。

道から遠くない集落には必ず小さい広場があり、そこにだけは大勢の人が集まっている。一様に白とも黄土色ともつかぬ色の長いマント風、いやネグリジェ?風の衣をまとい、多くは同色のターバンを巻いている。このターバン、カッチ!頭の上だけで納まるのではなく一方の布の端は偏り下の方までたらし、ヒラヒラさせている。中には裸足のものもいる。何かなあと良く見ると市がたっているのだ。物々交換もあり金銭取引もあるのだそう。しかし目に入る物は野菜類と羊ばかり、つながれている羊もあり、足をくられて車に乗せられているものもあり、さばかれた大きな塊でさらされているものもあった。



3台のランクル

ドライバー曰く、犠牲祭前だから市は賑っているのだとか。少し大きな宿場町のような集落では物凄い煙を上げながら羊料理の屋台を出しているところもあった。

丁度お昼ごろ、突如日本でも見慣れたしつらえのドライブインレストランに停車した。「へえ、こんなものも有るんか」決して豪華ではないが抵抗無く入れるしつらえである。お昼時とあり車も6-7台は停まっていた。ガラス張り!の食堂は日が差し込み暑いくらいであった。食堂の片面は長いカウンターになっており、現地の人達は夫々に注文し飲料等テーブルに運んでくつろいでいる。我々も見慣れたコークなどをテーブルに持ち帰る。昼飯の注文はさすがに様子がわからず、花婿氏が日本人の口に合いそうなものを注文したようだ。料理はウェイターがあらぬ方角から運んできた。

赤い素焼きの皿に三角帽子風の背の高いふたがついている。ふたはウェイター氏が取って持ち去った。さらの上は羊肉の大きな塊、野菜類、豆類がかなり強力な香辛料の色と香り漂わせながら載っていた。これがモロッコの代表的な料理「タジン鍋」というものであることを始めて知った。これからの何日間か、このお鍋に悩まされることになることなど知るすべもなかった。とにかくすごいボリュームである。さらに色鮮やかなサラダの小皿、大きく薄く円盤状に焼いたパンと思しき主食であろうか。とてもじゃないが日本人の胃袋には多量のお釣りが出ること間違いのない量であった。お味の方は三口、四口目位までは比較的淡白でまずくはないが、変わった味であった。努力しても三分の二をクリアするのは到底困難であった。

と例のオーバーモジが始まった。音につられてその方に向くと、何とドライブインの中にも礼拝所があり、何人かが絨毯にひざまずきお祈りの最中であった。それにしても、我々のドライバー諸氏はちっともお祈りをする気配はなかった。イスラム教徒には違いないのだが色々なのかなあ。この礼拝所から少し先を回りにんだところにトイレがあった。日本のドライブインのトイレも最近は清潔な所が多くなってきた。



タジン料理 M氏撮影



タジン鍋 道端で売られている

しかし、今でもそのまま車に乗るのはいやな感じのトイレも少なくない。さてこちらのトイレはと不安をいだきながら、そしてコーランを聞きながら踏み込んで驚いた。その清潔なこと、ピカピカに磨き上げられ、水浸しでもない。出口にはでっぴりと体格の良い女性が控えめに座っていた。さりげなくデラハイムコインを渡すと静かに顔をあげやさしい顔つきで会釈してまた視線をおとした。そうか、彼女が掃除してくれているのか！ つれの女性曰く私出て来てからコインのことに気がついてん、無かったけど通してくれはったよ、そらそやる、そんなとこで押し問答してどうすんねん。

腹ごしらえも終わった頃、花婿氏がみなを手招きしてスタスタと歩き出した。棟続きの半地下室のような場所にでた。先ほどウエイター氏が出てきた方角であった。何とそこにはあの三角帽子風の蓋のあるタジン鍋が真っ直ぐ横に整列し、或るものは盛んに湯気をあげていた。優に14、15はあろうか。炭火なのかガスなのかは確認できなかった。娘婿氏その前を通り過ぎ更に進んでいく。また地表に出て建物の遥か端の方に来てしまった。そこにはかなりの人数が集まって活況である。何かと覗き込んで大仰天。10にも及ぶ皮を剥がれた羊が天井からぶらさげられているではないか。如何にもその部分を強調するかのように睾丸まで綺麗に皮をむき、あからさまにこちらを向けてつるされているもの、何と一對の睾丸だけの剥き身も間にぶら下げられている。特別に価値でもあるのだろうか。さばいて塊になったものは台の上に所狭しと広げられている。ずっと奥の方で細かい仕事をしている人達も見える。タジンの材料はここで調理されているのだと容易に想像がついた。持ち帰る客のために、求めに応じさばいて、或いは丸ごと販売する機能もそなえられているのであった。

しばらくまどろみながら南下のドライブは続く。人家も見られない道端で少年が、ゆうに50、60センチもあるうかと思える大魚をたった一匹、頭上に掲げながら車に向かって叫んでいる。勿論商売なのだが、この砂っばらの中でどうして魚などど深く考える気力も無く、また、まどろみの世界におちていった。



えげつなー M氏撮影

大阪国際交流センター・ラジオクラブ Osaka International House Radio Club

e-mail: ji3zag@ji3zag.net

Newsletter, Web,
<http://ja3.net/ihouse>

Rollcall @14.155MHz
Every Saturday 0000UTC

Monthly meeting
on the 2nd Friday